

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	渡 邊 勝 仁
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目			
<p style="text-align: center;">日本人大学生英語学習者に対する 語頭子音連続発音指導の効果に関する研究</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	深 澤 清 治	
審査委員	教 授	築 道 和 明	
審査委員	教 授	柳 瀬 陽 介	
審査委員	教 授	松 見 法 男	
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文の目的は、(1) 日本人大学生英語学習者の語頭子音連続（以下、ICC (Initial Consonant Clusters)）の発音における母音添加の特徴を解明し、相対的な難易度を決定することと、(2) 本研究で取り上げた 2 つの発音教育指導方法は、日本人大学生英語学習者にどのような効果があるのかを検証することの 2 点であった。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第 1 章では、本論文の目的と意義および論文構成を述べた。第二言語としての英語 (ESL) を指導する環境下では、子音連続を含む英語発音に関しての先行研究は数多く存在するが、日本人英語学習者へ特化した先行研究が不足していることを指摘した。</p> <p>第 2 章では、本研究に関しての先行研究の概観を行った。各実験で使用・提示した、正確な子音の発音のための調音について説明し、子音と ICC の発音指導に関して説明した。また、Jenkins (2000) の提唱する Lingua Franca Core に基づき、正確な ICC 発音の重要性を説明し、その問題点についても説明した。さらに、子音連続における母音添加に関する先行研究の結果から、無声音と有声音から成る組み合わせのうち相対的に難易度の高いものは、有声音と有声音 C[+voice]-C[+voice] (11 通り)、無声音と有声音 C[-voice]-C[+voice] (21 通り)、無声音と無声音 C[-voice]-C[-voice] (4 通り) の 3 つであった。しかし、合計 36 通り（特に C[-voice]-C[+voice] の 21 通り）のすべての ICC の相対的な難易度は、明らかになっていないことを指摘した。また、日本人英語学習者に特化した指導方法の詳細も明確ではないということから、以下 2 点を研究課題として設定した。</p> <p>(1) ICC を習得する際の C[-voice]-C[+voice] (21 通り) の相対的な難易度はどのようなになっているのか。</p> <p>(2) ICC に関する 2 つの指導方法は、日本人大学生英語学習者にどのような効果があるのか。</p> <p>第 3 章では、先行研究による結果の確証を得るための実験を実施した (実験 1)。その分析の結果として、先行研究の結果の通り相対的に難易度の高い組み合わせは、C[+voice]-C[+voice]、C[-voice]-C[+voice]、C[-voice]-C[-voice] の順であった。この結果から、次の実験では C[-voice]-C[+voice] に焦点をあてることとした。</p>			

第4章では、研究課題(1)に答える実験が実施された(実験2)。当初21通りであったICCは、16通りに限定された。C[-voice]-C[+voice]の組み合わせのICCの相対的な難易度を決定するために、コンピュータプログラムで調査協力者の母音添加の間隔を計測した。その結果として、相対的な難易度の上位7つの単語は、[sm] smell, [ʃr] shrimp, [sn] snow, [tw] twig, [sl] slit, [θw] thwart, [θr] throughであった。ICCの一つ目の子音が /s/, /ʃ/, /θ/ の摩擦音であり、二つ目が流音(liquids), /l/, /r/ や鼻音(nasal), /m/, /n/ の場合に難易度が高いという結果が得られた。

第5章では、研究課題の(2)に答える実験を実施した(実験3)。2つの異なる指導方法により、日本人英語学習者にはどのような効果があるのかを検討した。本実験では、ICCを12通りに限定して調査を行った。1つ目の指導方法Aでは、ICCを含む単語の反復練習、最小対語での訓練、さらにはICCのみの反復練習など多くの繰り返しの訓練を実施した。一方、2つ目の指導方法Bでは、指導方法Aと大きく異なった特徴として、ICCを含む単語を自ら発音し、自分の音声をスマートフォンに録音することであった。その後、パートナーと録音音声を交換し、お互いの音声を評価し、さらにパートナーを交換して評価を行った。実験の分析結果から、日本人大学生英語学習者には、両指導方法のうち、指導方法Aが効果的であり、/kr/, /ʃr/, /sn/, /fl/, /kl/ が含まれる単語の発音に効果があることがわかった。

第6章では、本論文の成果と課題をまとめ、以下の2点の教育的示唆を示した。

(1) 日本人大学生英語学習者に対して、限られた英語学習授業時間内での、ICCを指導する上での相対的な難易度を解明することができた。今日の日本人大学生英語学習者は、英語の授業で発音の指導を受けることは限られていることが多いので、難易度の高いICCを限定する必要がある。

(2) 指導方法Aは、日本人大学生英語学習者には極めて効果的である。ICC発音の上達にはある程度の個人差はあったが、全12個の単語のうち指導方法Aでの上達は10個であった。

本研究は、次の2点において高く評価することができる。

(1) 日本人英語学習者に必要なICCの相対的な難易度を解明できたこと

限られた英語指導時間の授業内において、36通りすべてのICCの指導が可能でない場合、難易度の高いICCだけを指導することが可能である。

(2) 日本人英語学習者に特化した効果的な発音指導方法開発の前進に資したこと

一般的にあまり発音指導が行われてきていない日本の英語教育において、日本人英語学習者が最も困難を感じるICCを含む単語を使用した反復発音訓練などによって、学習者の発音能力の向上を試みる研究を実施したことは、今後同様の研究を行う上で重要な示唆となるであろう。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士(教育学)の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。